

追悼 渡辺博史先生

## お別れの言葉

学園長 佐伯弘治

故、渡辺博史教授の霊に謹んでお別れの言葉を申し述べさせていただきます。

一昨日、朝、六時三十分、藤枝社会学部長から「今、我孫子の東邦病院におります。渡辺先生が二時半頃、お亡くなりになりました」という報せを受け、私は一瞬、わが耳を疑いました。十時少し過ぎ、私は病院につきましたが、その時、貴方は、もう霊安室に移っておられました。御遺体を前に、三十六年に及ぶ貴方とのおつき合いの一齣一齣が私の脳裡をかけめぐりました。

昭和四十一年八月、文部省の在外研究員として、一年間のヘブライ大学留学を終えて流通経済大学に着任された貴方は、少壮社会学者として輝くような存在でした。

当時、わが国でも関心の高かったイスラエルのキブツ研究の第一人者として、学界はもとより、マスコミにもしばしば登場され、学内では学生達の人気の的でありました。それ以来、今日まで、ナベ先生とナベゼミは、まさにわが大学の宝でありました。

貴方が、ユダヤ民族から学んでこられた「俺にも生きるスペースを与えろ」という言葉は、長い年月、安住の地を求めて世界をさまよったマイノリティーの怒りと悲哀を表したものでありましょう。そして、貴方の社会学は、そのマイノリティーの生きざまから人間の本性に迫るといものだったように、私は理解いたしておりますが、貴方の、その人間観、社会観が学生達の心を打ったのだらうと思います。

「人間はどこの学校を出たかではない。何ができるかだ」「調査なくして発言なし」貴方のこれらの言葉と行動は、学生達の励みになったばかりでなく、私達同僚も大いに教えられました。

勿論、私達の大学も常に順風満帆だったわけではありません。昭和四十四年、船出したばかりの大学が、沈没寸前にまで追い込まれたことがありました。それ以来、私は同僚から推されて大学運営の中枢に座ることになりましたが、貴方はいつも、「学生や仲間達のために頑張ってください。私は貴方の後について行きます。」と、私を立て、勇気づけて下さいました。同僚の中には、安定した大学に転身する人もありましたが、貴方はそんなことには微動だにせず、「私は流通経済大学を死に場所と心得ています」と言い切っておられました。自ら口にされることはありませんでしたが、私は、貴方が、九州大学や御茶ノ水女子大学にも出講されている高い実績の持主であることをよく承知して

おりました。

その後、貴方を軸にして社会学部を設置し、さらに流通情報学部、法学部を加えて、四学部に大学院と、今日の社会科学系中規模大学にまでなりましたが、貴方は社会学部長、学園の理事として大学の発展に大いに力を尽くして下さいました。

そんなことなど、いろいろ想起いたしますと、今日、私は、貴方の霊に、あらためて、「渡辺さん、有難う。お世話になりました」と、一言申し上げずにおれません。

最後に、やっぱりナベさんと呼ばせて下さい。

さようなら、ナベさん。どうか一足先に行っていて下さい。そのうち私もまいります。あの世で、また、一献汲み交わしましょう。